

環境と防災をテーマに幅広く研究

環境問題は みんなで考える時代

● 今回紹介する村上仁十先生(工学博士)の研究室は現在、助教教授の上月先生、院生を含む学生35名、社会人ドクター5名の大所帯です。

● 研究室のテーマは「環境と防災」。範囲の広い大きなテーマであるために、テーマごとにいくつかのグループに分けて研究をしています。

● その内容は次のようなものです。

● **勝浦川**

ダムにからむ生態系の研究。

● **津波**

村上先生ご自身30年近く取り組んでいる津波とその避難対策の研究。最近では東南南海地震の予想もあり、たいへん注目されている分野です。先生は県内はもとより四国の他県からも依頼され、津波のシミュレーションや防災マップの作成などに協力しています。

● **担体**

鉄工所などの産廃物を利用して、赤

潮の原因となる水中のリンやチッ素を取り除くという研究。

● **干潟**

徳島では古野川河口やマリニピアの開発などで問題になった干潟に関する研究。

● **沖洲**

港湾内の水質を守る研究。特殊なブロックにより、ヘドロなどの堆積を防ぐというこのシステムは特許を取得しました。

● **環境教育、等々。**

「環境問題はいろいろな分野で取り組まれています。法律や技術、倫理的な問題まで幅が広いものです。したがってお互いに情報を交換したり、技術を共有しながら全体的に取り組んでいく必要があるのではないのでしょうか。いろいろな分野の人に研究室に来てほしいですね」

お母さんの 故郷の川で研究

白鳥さんは村上先生の研究室で、勝浦川の正木ダム周辺の調査をする。ことにより、ダムの下流域の水をどのようにすればきれいにできるか、あるいは淡水の生態系の研究、自然と共生していくかといったことを課題として研究に取り組んでいます。

「勝浦川上流の正木ダムは洪水防止を目的とする他、そこからパイパスによって発電用の水を取っています。そのため本流に流れる水は少なく、水もにごり、川底の藻なども多くなっています。しかしダムより上流には砂利が多く水はきれいに澄んでいますし、発電所を過ぎるとまたきれいになっているのです。ダムと発電所のために、その間の本来の川が汚れていることがよくわかります。」

現在、白鳥さんのチームは4名。白鳥さん自身は研究を始めて4年となり、週に一度は現地に出かけています。

この問題を解決するために、ダムより上流のきれいな水をバイパスによって、直接ダムのすぐ下流に送っては、と白鳥さんたちは考えています。

奈良県出身の白鳥さんですが、お母さんの実家が上勝町。子供のころから徳島に遊びに来るたびに勝浦川や周辺の自然とふれあってきたことから環境問題には以前から興味がありました。

先輩が後輩の めんどろをみる

ちよつと徳大にエゴシステム工学専攻ができたこともあり、1年生の時から村上先生の研究室で勉強し

大所帯の村上研究室では、村上先生と上月先生の二人で全てを見ていくことは困難なために、先輩が後

輩のめんどろをみるという形ができています。

「ドクターがマスターを、マスターが学部学生を見る、ということにより先輩と後輩の良い関係ができています」

と村上先生が語れば、

「先生は父親のような存在ですね。いろいろな気づかってくださいますし、就職などの相談にも気軽にのってくれます」

と、白鳥さん。

春の花見や新入生歓迎会に始まり、夏のキャンプ、OBとの交流の場となる秋の同窓会、忘年会、謝恩会など、人数は多くてもアットホームな雰囲気があります。

近年、ダムの建設には反対意見も多いのですが、すでにあるダムをどのように運用していくかという白鳥さんたちの研究、また環境と防災の問題にあらゆる角度からアプローチする村上研究室の成果は、人が自然と共生共存していくうえで大切な指標となることでしょう。

